

## 研究ノート

## グリーンツーリズムを活かした観光まちづくり

——南泉州地域等における実践を事例として——

中 尾 清

## 1 はじめに－背景と研究の目的

## (1) 南泉州地域における観光まちづくりの方向性

南泉州地域（岸和田市・貝塚市・泉佐野市・泉南市・阪南市・熊取町・田尻町・岬町の5市3町）は、青い海・市街地・田園地帯と青い山脈が連なっており、気候温暖、風光明媚なところである。農・水産業が盛んであり、近年までは紡績業やワイヤーロープ製造業などの第二次産業も盛んであった。また、大阪市や堺市などすぐ近くに雇用の場があり、経済的なものも含めて、住民にとっては、恵まれたところに位置している。

1994年、関西国際空港（以下、「関空」という。）が開港した。それを契機として、関空とりんくうタウンを中心に南泉州地域の活性化を図られてきたが、近年におけるわが国の長引く不況により泉南地域の各市町は、厳しい行政経営環境におかれている。そして、これらの状況を打開するために、一つの有効な方策として“観光まちづくり”や“観光振興”による地域活性化が、クローズアップされてきている。

2007年1月14日、筆者は熊取町で『熊取の観光まちづくりとホスピタリティー-21世紀における田園観光都市くまとりを目指して』と題して講演した。その中で熊取町は、「田園“観光”都市」<sup>1)</sup>を目指すべきである、と論じたが、これは南泉州地域の各市町にもあてはまるものである、と確信している。

## (2) 本論の目的と研究方法

観光まちづくりとは、「地域が主体となって、自然、文化、歴史、産業、人材など、地域のあらゆる資源を活かすことによって、交流を振興し、活力あふれるまちを実現するための活動」<sup>2)</sup>のことである。近年全国のあらゆる地域で、歴史・文化・風土・祭り・人情に触れる観光まちづくりに対する期待がますます高まってきている。

本稿の目的は、筆者が係わったグリーンツーリズムの実践事例から南泉州における“観光ま

ちづくり”や“観光振興”による地域活性化、とりわけ、“グリーンツーリズムによる観光まちづくり”のあり方を探り、提案するものである。したがって、文献調査よりもグリーンツーリズムの実践を通して、学んだこと、感じたことに重点をおいて論ずるものである。

### (3) 本論における概念の整理

グリーンツーリズムを論ずるにあたり、基礎になる概念を整理しておきたい。

まず、「自然環境」とは、何か。丹下博文編『地球環境辞典』（中央経済社、2003年）によると、自然環境とは、『地球環境辞典』によると、「人間を取り巻く自然界に存在する大気、水、土壌、動植物などをすべて含み、人為の加えられていない自然な状態を指す。この自然環境から人類は大きな恩恵を受けて生存しているが、今日において「環境破壊」という場合には人間による自然環境の破壊を意味するようになった<sup>3)</sup>とされている。それでは、「環境破壊」とは何か。環境破壊とは、自然環境を人為的に汚染し完全に壊してしまうことである。そのためには、個人や組織の活動が環境に与える悪影響、すなわち、環境負荷を可能な限り低減することが求められており、さらに、環境破壊が進まないように細心の注意を払って環境を守ることが自然環境保護である、とされている<sup>4)</sup>。

「環境保全」とは、何か。それはさらに考え方を進めて環境（自然）保護だけでなく、破壊された「環境の復元に務め、最良の状態に維持すること」<sup>5)</sup>である、とされている。

上記の考え方を踏まえて、環境（自然）保護や地域振興に役立つ地域の観光を考えてみると、その基礎にはルーラルアメニティ（rural amenity）がある。ルーラル（rural）とは、「田舎の」「田園の」という意味がある。アメニティ（amenity）とは、空気、水、山など人間を快適にしてくれるものの総称である。

たとえば南泉州地域におけるルーラルアメニティには、①美しい田園景観、瓦葺き家屋が連なる集落の景観、川、ため池、里山などの「半自然的アメニティ」と②文化、歴史、伝統、歴史的建造物（中家住宅、降井家住宅書院など）、だんじり祭などの「人工的アメニティ」をあげることができる。

ルーラルアメニティは、手つかずの自然とは異なって、農業を媒介とした、人間と自然の相互作用によって産み出される。そして、農村における定住環境を豊かにし、都市住民に憩いの場を提供すると共に、都市と農村との交流、旧住民と新住民との交流の場となり、グリーンツーリズムなどの実践を通して、新たな就業機会を生むものである。

## 2 グリーンツーリズムとは

### (1) グリーンツーリズムとは

グリーンツーリズムとは、都市住民が豊かな自然や美しい景観を求めて農山漁村地域においてその自然・文化・地域の人々との交流や体験を通じて楽しむ余暇活動である。漁村地域ではブリーツーリズムともいわれている。従来の「農業観光」や「観光漁業」に比べると、観光者（主として都市住民）が主体的に取り組む“新しい観光”の概念である。

「グリーン」（とか「ブルー」）には、農山漁村地域の持続可能性や環境保全の意味が含まれている。したがって、グリーンツーリズムは、①農山漁村の活性化、②農山漁村の環境保全、③ゆとりある都市住民の余暇活動、という三つの目標を実現するものである<sup>6)</sup>。

### (2) “一般的な観光”とグリーンツーリズムとの相違点

“一般的な観光”とグリーンツーリズムとの相違点を示すと表1の通りになる。

表1 “一般的な観光”とグリーンツーリズムとの相違点

“一般的な観光”	グリーンツーリズム
① 風光明媚で、温泉や有名な神社仏閣などの観光資源を有する“観光地”の農山漁村で展開している。	① あるがままの農山漁村の姿を資源としてごく普通の農山漁村で「ファームステイ」（「農家民泊」など）として展開している。
② 不特定多数の観光者が対象である。	② 特定のリピーター（都市住民）が対象である。
③ 不特定多数が出す空き缶、ごみ、交通渋滞、騒音などの“観光公害”が常時発生している。	③ なじみのあるリピーター（都市住民）が中心なので“観光公害”は、比較的少ない。
④ 地元の農林水産業との結びつきが比較的弱く、地元経済の活性化とつながりにくい。	④ 地元の食文化や農林水産業が都市住民との交流資源となり、地元経済の活性化に結びついている。

出所：宮崎猛編著『グリーンツーリズムと日本の農村』（農林統計協会、1997年）、12～13頁を参考にして作成した。

### (3) 農山漁村社会と地場産業の活性化の方向

農山漁村社会と地場産業の活性化の方向には、次のようなものが考えられる。

- ①農山漁村と都市との交流により、交流人口の増加と定着（Iターン）が図られる。
- ②地元のふるさとイメージが確立され、都市に対する情報発信が強化される。
- ③地元での農林水産物等の消費拡大（地産地消）が図られる。
- ④ふるさとイメージと結びついた地域特産品の消費者への普及が可能となり、高付加価値商品（ブランド）化が可能となる。

- ⑤地域特産品の生産・加工・直売の農林水産業ビジネス化が地元主体で推進される。
- ⑥その他宿泊・レストラン・売店などのサービス産業を中心に、若者・高齢者・女性の活躍の場・雇用の場が生まれる。

### 3 南泉州地域等におけるグリーンツーリズムの展開事例

都市との交流で、農山漁村地域の活性化を図るものとして、「田んぼの学校」、「畑の学校」、「ため池の自然学校」、「里山の自然学校」、「郷土の歴史学校」、農家民泊、郷土料理（豆腐づくり、味噌づくり、そば打ち、うどん打ち、浅漬けなど）、山麓部への期待（植林、間伐、炭焼き、紙漉き、野鳥観察、星座観測など）、地曳き網、潮干狩りなどが考えられる。

以下、南泉州地域等で筆者が取り組んだグリーンツーリズムの展開事例を紹介しよう。

#### (1) 根来街道グリーンツーリズム推進協議会とその事業

根来街道グリーンツーリズム振興協議会（以下、「協議会」という。）は、2003（平成15）年7月に「根来街道の沿道にある泉南市および岩出市内の歴史、文化、自然、農林水産行、伝統行事等を活かし、観光施設関係者、農林水産業者、企業、地域住民等の連携を図り、グリーンツーリズムの推進を通じ地域振興を図る」ことを目的として結成された。

メンバーは、大阪府、和歌山県、泉南市、岩出市、JA、漁協、農事組合法人、南海電鉄、バス会社、根来寺のほか NPO 法人、ボランティア団体など、22 の行政・企業・市民団体で構成されている。事務局は、行政4団体の持ち回りで、1年交代である。

協議会の中には、実質的な実行部隊として「企画部会」が設置されており、事業を企画して実行に移している。例年以下のような事業を実施し根来街道の沿道におけるグリーンツーリズムの方向性を探っている。

- ①PR パンフレットの作成、
- ②スタンプラリーの開催、
- ③紀泉山脈横断ハイキングの実施、
- ④会員向け研修会の実施、
- ⑤各種イベントの後援

中でも紀泉山脈横断ハイキングが協議会のメインの事業として位置づけている。2008年2月24日（日）に実施した紀泉山脈横断ハイキングの概要は、次の通りである。

コースは、「紀泉わいわい村」から梵天山展望台・「根来げんきの森」を経由して根来寺までのハイキングである。



9 時前から、JR 岩出駅・和泉砂川駅、南海樽井駅を出発したバスが、「紀泉わいわい村」に到着し、参加者が続々と集合してきた。当日は曇り空で時々日差しがあり、まずまずのコンディションであった。主催者を代表して企画部会長である筆者が開会の挨拶をし、来賓として地元選出の大阪府議会議員が挨拶をした。その後、出発前の体操で身体をほぐし、続々と出発

して行った。

「紀泉わいわい村」からの登山道は、いきなり急坂を登ることになるのでスタッフが先導してペースを合わせて細心の注意を払って登って行った。

参加者は梵天山の展望台から大阪湾と南泉州地域を一望のもとにして、府県境を目指して歩いて行った。和歌山県に入り「根来げんきの森」を望むピークに到着したが、風が吹き、時折雪が舞っており、若干寒かった。遥か向こうには岩出と紀ノ川が見えて、参加者は元気よく、「根来げんきの森」を目指して降りて行った。筆者もほぼ最後のグループと一緒にそのピークから降りていき、スタッフの皆さんの心づくしの“豚汁”を頂いた。

「根来げんきの森」で昼食を済ました参加者は、最終地点の根来寺の駐車場を目指して随時出発していき、約 250 人の参加者全員が完歩した。事故もなく今年の「紀泉山脈横断ハイク」は終わった。

**【開会あいさつ】**（根来街道グリーンツーリズム振興協議会・企画部会長）

皆さん、おはようございます。企画部会長の中尾です。本日は、紀泉山脈横断ハイクによるこそ！主催者を代表いたしましてご挨拶申し上げます。

根来街道グリーンツーリズム振興協議会は、大阪府泉南市から和歌山県岩出市に至る根来街道を軸に、歴史と文化、自然環境豊かな主として紀北と南泉州地域を両輪として、グリーンツーリズムを振興し、広域的な交流と連携を図ることを目的として、平成 15 年に設立されました。現在、行政・民間団体合わせて 22 団体が参加して、グリーンツーリズムの勉強会やイベント、広報活動などをおとして、両地域の活性化のための活動をしています。

本日の「紀泉山脈横断ハイク」も大阪府側から登り和歌山県側に降るというコースです。今の根来街道は車の往来が激しく、ハイキングは困難ですから、このコースで、府県境の自然・景観を楽しんで頂くとともに、かつての根来街道とそこを往来した旅人や物資の運搬など、往時を偲んでいただければ、幸いです。

本日は、天候にも恵まれちょうど良い条件の下で開催できそうですが、ここを出発いたしますと、いきなり急坂になります。ゆっくりと登ってください。梵天山の展望台からの泉州と大阪湾、そして、土仏峠や根来山げんきの森付近からの紀北と紀ノ川のすばらしい景色を堪能してください。

最後に、厳冬期のハイキングでございますので、どうか十分体調に気をつけられまして、事故のないように、完走していただきますよう、お願いいたします。

豚汁とぜんざいがお待ち申し上げます。

## (2) 観光文化・レジャー実習（グリーンツーリズム）

筆者は、大阪観光大学の教員になって、専門演習の一部として過去3回、田植え・稲刈り・餅つきを実施してきた。第1回目は、大阪府が金剛生駒紀泉国定公園（泉南市）の山間に“紀泉ふれあい自然塾”（2003年4月に“紀泉わいわい村”としてオープンされた。）を整備していたころに実施した。

“紀泉ふれあい自然塾”には、生活体験施設（農家）6棟、管理・研修棟、キャンプ場、田んぼや畑（生産体験施設）、自然観察コースなどが整備されていた。特に、宿泊ができる生活体験施設などは、昭和20年代の泉南の農家を忠実に再現しており、土間や板の間、囲炉裏、かまど、五衛門風呂もある。

整備中の2002年の梅雨時に17人の中尾ゼミ所属学生と1泊2日の“里山体験”をした。初日は、関西国際センターの留学生3人（ネパール、インド、メキシコ）も参加して一緒に田植えに挑戦した。裸足で田んぼに入るのはほとんどが初体験である。でもすぐに慣れて、20人が一列になって田植えをした。田植えの後は、飯炊きだ。薪でご飯を炊く。カレーを作る。お湯を沸かす。風呂を沸かす。みんな初体験である。戸惑いながらも大阪府の職員の指導を受けて、農家体験をした。筆者は、この時から本格的にグリーンツーリズムの実践と研究を始めた。なお、第2・3回目は、熊取町の専業農家（ゼミ生の実家）の協力により、田植えから稲刈り、餅つきまで実施させていただいた。

表2 2007年度観光文化・レジャー実習（グリーンツーリズム）【日程表】

回	月	日	区分	実習内容
1			ガイダンス	実習の目的、実習の仕方、携行品など
2			講義	グリーンツーリズムの講義
3	6	17	実習	田植えの実習をする。
4	7	31	実習（講義）	田んぼの管理（草取りなど）や生きもの調査をする。
5	8	24	実習（講義）	田んぼの草取り、稲の生育状況の観察をする。 森林で間伐の体験をする。
6			中間まとめ	実習の反省、レポートの提出など。
7	9	15	実習	岸和田だんじり祭に参加し、五穀豊穰に感謝する。
8	10	14	実習	稲刈りとカカシ作りをする。
9	10	27	実習	芋掘り（泉南市・山田家）、登録文化財の見学をする。
10	11	18	実習	収穫祭に参加し、餅つきなどをする。
11			まとめ	実習全体の反省、今後の課題を検討する。

2007（平成19）年度からは、拡大して、実習授業「観光文化・レジャー実習」として、グリーンツーリズムに取り組んできている。実習の目的は、観光学入門を学んだ内容のレベルアップをねらい、グリーンツーリズムの実践をすることにある。実習を通して、日本の「農」を考え、「食」を考えてもらうことは、観光学を学ぶものにとっても、重要なことであり、奥貝塚の「たわわ」は最高のフィールドである、と考えている。

この実習は、大阪府（農と緑の総合事務所）と農事組合法人奥貝塚・彩の谷の協力を得て、貝塚市にある農業庭園「たわわ」で、田植え・草取り・稲刈り・餅つき（あるいは、芋ほり）などを通して農業体験をするものである。

参考までに2007年度の実習は表2のとおりである。実習は、6月から11月まで行った。



### ①田植え

6月17日の田植え当日は、本学学生27人と「たわわっ子クラブ」の小学生・保護者60人ぐらゐが参加して、昔ながらの田植えをした。

田植え修了後に、地元の農事組合法人奥貝塚・彩の谷の農業者と大阪府農と緑の総合事務所の職員と意見交換をした。学生にとっては、農業者の苦労話など、“農”や“食”について理解を深めることができた。

### ②田んぼの管理

7月31日午前中は、6月に田植えをした田んぼで、農業者から要領を教わり、草取りをした。2枚のたんぼの1枚には、除草剤が撒かれていたので、ほとんど雑草はなかった。もう1枚のたんぼには、雑草が生えにくいように、「おから」が撒かれていた。なぜ「おから」か、というと、「おから」を撒くとその栄養分で、藻が生えて、その藻が光を通さないので、雑草が生えない、ということであった。ひえ、カヤツリグサ（ミズガヤツリ、タマガヤツリツリ）、タマサブロー、ヒロハなどがたくさん生えていた。雑草は、たくましく、なかなかの大変な作業で、昔ながらの米作りには、このような苦労があるのだ、ということを実感した。

ある参加学生は、「草取りは、思っていたより大変でした。昔はこれを手作業でしていたのかと思うと気が遠くなりそうで・・・」と感想を述べている。その後、大阪府の職員から、稲、草や稲につく虫の話など「田んぼの勉強」をした。

### ③生き物調査

午後は、柵（キジ）谷川の生き物調査をした。小学生も一緒なので、注意を払いながら、学生諸君は、「大はしゃぎ」であった。「生き物調査は久しぶりに童心に返ったような感じがして

楽しかった。」「自然の中で遊ぶことも大切ですね。」と感想を述べている。

また、中国からの留学生の一人は、川に入ってこのようなことをするのは「初めてです。」と語ってくれた。

参加者は、カワムツ、ドンコ、ドジョウ、メダカ、サワガニ、ヤゴ、カワニナなど、水質の良いところに住む生物をたくさん捕まえた。大阪府の職員の解説により観察会が行われ、自然保護についての大切さを実感できる良い機会であった。



#### ④稲刈り

10月14日（日）、奥貝塚・たわわで稲刈りに挑戦した。田んぼには3回しか足を運んでいなかったが、稲はすくすく成長し、たわわに稔り、その日に収穫の日を迎えた。もっとも日常のお世話は、地元の農家の皆さんが汗水を流していただいたからであり、「エラソウナ」ことは言えないが、たわわっ子クラブの小学生達と一緒に稲刈りに挑戦した。



#### ⑤芋掘り

10月27日の午前中は、泉南市の山田家の畑で、で芋掘りをし、午後にも山田家の母屋で開かれた「熊野街道フォーラム」に参加した。朝から雨が降っており芋掘りの実施は、危ぶまれていたが、実施する頃には雨も上がり、日差しもなく絶好の「芋掘り日和」になった。畑に行くと、山田家保存活用協議会（山田家は登録有形文化財）の松田さんの指導を受けて、早速“備中鍬（びっちゅうぐわ）”で畑を掘り起こした。

へっぴり腰ではあるが、みんな一生懸命に鍬を下ろすと「出てくるは、でてくるは」大きなサツマイモが。面白いように収穫できた。山田家に戻り、蒸かしていただいていた芋をみんなで食べた。少し甘みがなかったが、“ホクホク”の芋に舌鼓を打った。

#### ⑥収穫祭

11月18日、奥貝塚・たわわで、「たわわっ子クラブの修了式」及び「彩農園クラブ会員の収穫祭」に参加した。6月に田植え、8月に雑草引き、田んぼや川の生き物調査、間伐、10月には、稲刈り、芋掘りを実践し、また、グリーンツーリズムの座学などもしてきたが、一応今日最終日を迎えた。





参加者は「たわわっ子クラブ」の小学生達の“お絵かき”のサポートをし、修了式の手伝いをし、その後子ども達に混じって「餅つき」に挑戦した。

餅つきが終わってから、地元の皆さん（農事組合法人 奥貝塚・彩の谷）の皆さんの心づくしのぜんざい、芋汁と自分達が搗いた餅を賞味した。

### (3) 小学生熊取探偵団（熊取町教育委員会と連携事業）

#### ①取組の内容

大阪府泉南郡熊取町との連携事業として、2003（平成 15）年 6 月から 11 月まで小学生熊取探偵団の事業を実施した。この事業の目的は、熊取町内の小学生が地域のことを学ぶことにより郷土愛を育み、自分の住んでいる町を再発見するきっかけづくりをすることであり、また、学生にとっても大学所在地のことを学ぶことによって、観光学の学習効果を高めることである。

本事業には、小学生（7 人）、本学学生（中尾ゼミ生 15 名）とアドバイザーとして教員（2

名：布引教授と小生）が参加し、町職員、農業者、JA、京都大学、繊維工場の経営者、だんじり祭の関係者等のアドバイスを受けた。



5 班にわけて、下記のテーマで、6 月から 11 月まで、現地調査、文献調査、実習などを行い、11 月 2 日、国の重要文化財・中家住宅にて、熊取町民の参加を得て報告会（写真）を行った。

〈テーマ〉は次の通りである。

- ・ 1 班 農業を探検する（特産品の水なす）
- ・ 2 班 大学を探検する（京都大学原子炉実験所）
- ・ 3 班 歴史と文化財を探検する（中家と雨山）
- ・ 4 班 繊維工場を探検する（特産品の綿織物）
- ・ 5 班 祭りとだんじりを探検する（歴史や祭りの様子）

## ②取組の特色

本事業の特色は、熊取町教育委員会と本学が連携して、熊取町内の小学生と本学の学生の参加と地域住民との触れ合いのなかで、地域の歴史・文化・産業・祭りやイベントを学ぶことをあげることである。そうすることにより小学生の郷土愛を育み、自分の住んでいる町、学んでいる町の再発見をするきっかけづくりができ、また、学生にとっては、実地にフィールドリサーチを行い、報告書をまとめ、住民の前で発表することにより、調査・研究能力の向上を図ることができた。

## ③取組の有効性

熊取町では、報告書を町内の小学校に配付し、小学校教員の総合学習の参考としてもらっている。地域のことを知らない小学生と大学生がチームを組んで、調査・研究をしたので、新しい発見があった。また、小学校教員にも刺激を与え、総合学習のテーマの一つとして“地域学”を取り上げようという機運が起こっており、グリーンツーリズムと小学生の「食育」は重要なテーマとなってきた。

## (4) 観光文化実習（地域観光振興論－高知県安芸市）



### ①高知県安芸市東川地区

2009年9月、観光文化実習（地域観光振興論）で高知県安芸市の山の中の東川という集落へ出かけた。この中山間地域化と高齢化の住人は約100人である。安芸市立東川小中学校には小学生が3人しかいない。過疎化と高齢化が進んでいる地域である。

「東川・まちとむらの交流を考える会」のみなさんの指導で入河内大根（にゅうがうち）の

種まきをした。雨が本格的に降ってきたが、みんな濡れながら、足下もどろんこになって種まきに熱中した。

昼は、地元のお母さんたちと一緒にゆず入りちらし寿司や「米（べい）なす」のタタキ、キュウリもみなどを作ったり、天ぷら（芋、人参、ピーマン、カボチャ、インゲンのかき揚げなど）を揚げるいわば「料理教室」を体験した。

### ②高知県安芸市畑山地区

畑山のみなさんは、自分たちの集落を“畑山夢楽（むら）”と称してまちづくりをしている。畑山夢楽には、畑山温泉があり、そこでは“土佐ジロー”というブランドの鶏料理を出し



て非常な人気である。

ている。

土佐ジローとは、土佐地鶏（雄）とロードアイランドレッド種（雌）と掛け合わせた一代雑種である。1 代限りだけを土佐ジローという。無農薬野菜を食べ、土を食べる。雄は食肉として飼育される。雌の産んだ卵は“ぶるるん”としていて卵かけご飯には最高だ。卵を産まなくなると食肉として処分される。健康志向もあっ

#### 4 グリーンツーリズムによる観光まちづくりへの提案

以上、南泉州地域を中心に筆者が係わったグリーンツーリズムの実践事例の一部を紹介してきたが、その中で重要なポイントとして、南泉州地域における「ブランド」づくりと観光まちづくりを指摘し、具体的に提案したい。

##### (1) 南泉州地域における「ブランド」づくり

###### ①泉州「たまねぎ」の復権とブランド化

かつて南泉州地域は、「たまねぎ」の産地で有名であった。筆者が中学生の頃の地図帳には泉州のところに、名産品「たまねぎ」と書かれていた。ところが、今の地図帳には、書かれていない。淡路島が「たまねぎ」の名産地となっている。いつ泉州が消えて淡路島に移ったのだろうか。泉州「たまねぎ」は美味しいので、これは復活して、どんどん「たまねぎ」を作って、泉州「たまねぎ」の復権を目指してもらいたいものである。そして、「たまねぎ」を素材にして、観光土産品の開発をしてはどうか。

特に、田尻町では、「泉州黄たまねぎ」の発祥の地として、かつては「吉見早生」や「今井早生」という品種が盛んに栽培されていた地域である。「吉見早生」は、20 年前に農協への出荷ができなくなったことで、田尻町内から姿を消した品種であるが、町内の農家が自宅の床下で 20 年間大切に保存されていた「吉見早生」の種を、当時の大阪府立食とみどりの総合技術センター（現大阪府環境農林水産総合研究所『食とみどり技術センター』）に持ち込み、発芽試験をしてもらったところ、成功したので栽培することになった、とのことである。そして、「今井早生」の種は伝統野菜の種の保存に尽力している種苗店より入手して栽培している。このように、今やまぼろしのたまねぎと称されるたまねぎを栽培し販売することで、ブランド化

を図り、農業者と田尻町の活性化を目指して活動している。

### ②水なすの「ブランド」化

今は、「水なす」が泉州名産となっている。これは正に“全国区”である。東京でもたくさん売られているようである。進物用をインターネットで申し込んでも、「一ヶ月くらい先になる。」と、いわれたりして、なかなか手に入りにくいのが現状である。さらに「水なす」を泉州の代表ブランドにするためには、名前をつけて“泉州ブランド”化すべきである。

### ③田尻漁港の朝市の拡大と泉州各地に常設の朝市を！

もっと知名度を高めるために、田尻漁港の朝市以外に常設の朝市を設けて、農産物（たまねぎ、水なす、ふきなど）、海産物（和泉たこ、あなご、ひらめなど）などを販売する。うわさを聞きつけて都市からお客さんがやってくるであろう。いいものをつくり、安全安心の農産物を生産すれば必ず売れる。泉佐野市にある JA の「こーたりーな」の取組みを観れば、一目瞭然であろう。

## (2)「ブランド」力の向上－他都市に学ぼう！

京都の品物は、上等のイメージがある。みんな前に京友禅、京小紋、京くみひも、京人形、京漆器、京焼、京扇子とか、京野菜とか、「京」というのを付けている。

神戸も神戸ビーフ、神戸ワイン、神戸コロッケ、神戸プリンとか、何でもやたらと神戸を付けて「ブランド」化している。このように“国の光”には、「ブランド力」を高めることが大切であると思う。

### ①兵庫県豊岡市－コウノトリと共生するまちづくり

兵庫県豊岡市では、2005年にコウノトリが自然界に放鳥されて以来、「コウノトリとの共生」のまちづくりが展開されている。コウノトリのえさを確保するため、農薬を使わない「合鴨農法」を採用した米作りをしたり、冬場も田んぼに水をはったままにするなど、ドジョウやフナ、カエルなどの成育環境を整えている。そこで収穫された米は、“コウノトリ米”として「ブランド化」され、普通の米より高値で販売されている。

### ②高知県馬路村－ゆずによる村づくり

高知県馬路村では、特産の柚子を活かして蜂蜜柚子飲料「ごっくん馬路村」をインターネット販売し、好評を博している。そして、「ごっくん馬路村」は、素晴らしい「ブランド」商品となり、若者の雇用の場の拡大に貢献するようになった。

### ③岐阜県大垣市－水都まちづくり

岐阜県大垣市は、かつては木曾三川（木曾・長良・揖斐川）がもたらす豊かな地下水が至る所に自噴し、「水の都」と呼ばれていた。しかし、繊維産業が盛んになり、「繊維の町」にな

り、工場では、豊富な地下水を使うようになり、いつしか自噴泉の水位が下がってしまって、活用できなくなっていた。近年、繊維産業が衰退して、工場も無くなってきて、地下水位もあがり、自噴泉が復活してきている。地元のNPOが「自噴水を活かしたまちづくり」に取り組んでいる。

また、この自噴泉を活かして「わさびづくり」に取り組んでいる人も出てきた。しかも害虫駆除は本人が一匹ずつ取り除き、農薬を使わない「安心・安全」なわさびづくりをして、“大垣ブランドわさび”を目指している。このごろは、わさび田にカエルが虫を食べにやってくるようになり、それを目当てに蛇もくるようになったとのことである。

### (3) 一人から始まった花のあるまちづくり－泉南市梶本邸「ふじ祭」－



2009年4月26日、泉南市の紀州街道（熊野街道・小栗街道）沿い（旧信達宿）の梶本邸の「ふじ祭」が開催された。庭に植えられた1本の木から3万房の見事な花を咲かせており、いかに梶本さんが丹精込めて世話をされたのかが窺える。

「ふじ祭」には、毎年約3万人の見学者があり、地元の皆さんがボランティアで交通整理な

などをして、世話をしている。

「藤をたずねる人にやすらぎと去りゆく人に幸せを」の札に、梶本さんの優しい気持ちが伝わってくる。見学者は、みんなふじの花から感動をもらって、幸せな気分で帰っていく。昨年のおふじ祭には、残念ながら、その梶本昌弘さんのお姿は見受けられなかった。一昨年の12月に亡くなられているからである。

数年前、泉南市のSENNANまちづくり市民会議主催の「熊野街道シンポジウム」に梶本さんとご一緒させていただいたことがある。そのとき、ふじ祭に話が及んだ。コーディネータをしていた小生が、「梶本さんは、“平成の花咲じい”ですね。」と、“花咲じいさん”というところを、つい“花咲じい”とってしまった。「しまった。」と思ったときに、「ハハハハ、“花咲じい”でいいんだよ。」と話されたにこやかな顔が思い出される。フロアも大笑いで、和やかな雰囲気の中でシンポジウムを終えることができた。懐かしい思い出である。

また、「熊野古道沿いの信達宿という由緒あるところに住まわせていただいている者として、これに感謝と誇りをもって、この景観を後世に残したい」とも発言された。旧信達宿の皆さんも同じような考えの住人が多く、建て替えのときなど、“日本建築風”にするなど、景観

に配慮されており、信達宿を歩いていても気持ちのいい町並みが保たれている。

梶本さんは亡くなられたが、昨（2009）年の「ふじ祭」は、奥様や、息子さんたちご家族がご遺志を継がれて、「ふじ祭り保存会」の皆さんほかボランティアの皆さん、近隣の皆さんのご協力で、開催されている。

このまちでは、“一人から始まってたくさんのボランティアを巻き込んだ”花のあるまちづくりが展開されている。そして訪れる人たちに感動を与えている。

## 5 おわりに－課題と展望－

### (1) 総括と課題

大阪観光大学教員に就任してから約9年間、①根来街道グリーンツーリズム推進協議会、②観光文化・レジャー実習（グリーンツーリズム）、③小学生熊取探偵団（熊取町教育委員会と連携事業）、④観光文化実習（地域観光振興論－高知県安芸市）などのグリーンツーリズムの実践・実習と観光まちづくりに関わってきた。

筆者は、「本来、「観光」行動とは観光者が“いきがい”、すなわち、①“楽しみ”、②“喜び”、③“安らぎと感動”を得るものである、と考えている。そして、受け入れ側としての観光産業は、ホスピタリティ産業といわれるように、観光客を迎え、ホスピタリティ精神を発揮しもてなし、地域産業の振興を図ることが主たる役割であり、観光者の“いきがい”づくりを支援するものでもある。」<sup>7)</sup>と指摘してきたが、まさにこの約9年間にわたるグリーンツーリズムの実践と地域における観光まちづくりを通して、このことを実感してきた。

「観光」とは、「観光者が自己の自由時間（＝余暇時間）に非日常生活圏で行う様々な（広義の意味での“生涯学習”）活動で、観光消費を伴うものであり、「非定住性原則」・「非営利性原則」を有する活動である。また、観光者を観光客として受入する側は、ホスピタリティ精神を発揮して、“国の光”を磨くほか様々な活動（観光事業やボランティア活動）をすることによって、経済的・精神的対価を得る。そして、その様々な活動は、地域の経済や文化などに様々な効果をもたらし、地域の活性化につながるものである」<sup>8)</sup>という観点から見ると、残念ながら南泉州地域におけるグリーンツーリズムの実践と観光まちづくりは不十分である、といわざるを得ない。

それは市民ボランティア、行政、NPO法人、農事組合法人などによるグリーンツーリズムの実践や観光まちづくりが、まだ“ボランティア活動”や“コミュニティ・ビジネス”の域を脱していないということである。例えば、ほとんどの団体での取組みは、ボランティア活動であり、「精神的対価を得る」程度に止まっている。また、農事組合法人奥貝塚・彩の谷の場合

は、農産物の直販所を運営しているが、取扱農産物が少ないため、本格的な雇用拡大までは至っておらず、“コミュニティ・ビジネス”のレベルにある。

これだけ豊かな田園地帯と海に恵まれた南泉州地域で、繊維産業が“去って行った”現在、地域の活性化を図るためには、グリーンツーリズムの“農業ビジネス化”が必要とされているのではないかと考える。

グリーンツーリズムは多くの市民に、①“楽しみ”、②“喜び”、③“安らぎと感動”を与え、受入側は、グリーンツーリズム事業やボランティア活動をすることによって、経済的・精神的対価を得て、地域の活性化につなげていくことができるのである。

また、行政も紀泉わいわい村や根来山元気の森のように、施設を指定管理者制度の活用により民間団体や NPO 法人の運営に任せているが、さらなる拡大が必要であろう。

次に、ビジネス・NPO 事業・コミュニティ・ビジネスの比較をしてみたが、グリーンツーリズムは、農家と行政と協力態勢ができれば、表 3 のような形態による展開が可能である。

## (2) 展望

早急に農業“ビジネス”化は、無理であるとしても「“ボランティア活動”⇒“NPO 事業”⇒“コミュニティ・ビジネス”⇒“ビジネス”」という過程を経た展開が今後のグリーンツーリズムにとって必要である。わが国では、農業経営には、色々な制約があって一般市民が農業“ビジネス”に従事することは難しいが、まず、「“ボランティア活動”⇒“NPO 事業”⇒“コミュニティ・ビジネス”」の確立が重要なステップであろう。コミュニティ・ビジネスを成立させるためには、「ビジネス」として成立することが必要である、ということは、いうまでもない。コミュニティ・ビジネスはボランティア活動、仲間、趣味の活動とは異なるので、まず①ものづくり「品質」（地産）へのこだわりをもつ。②安定した受注・販売チャネルをもつ。③顧客（グリーンツーリズム参加者）満足度を追求する。④人件費は戦略性を持って設定する。⑤損益分岐点を考える。等を勘案しながら展開していくことが肝要である。

表 3 ビジネス・コミュニティ・ビジネス・NPO 事業の比較

目 的	ビジネス	コミュニティ・ビジネス	NPO 事業
営 利 性	営利>非営利	営利と非営利	非営利>営利
目 的	経済的価値	社会的使命と経済的基盤	社会的使命達成
事業原理	事業の成功と成長	草の根と適正継続利潤	草の根
利益配分	分配可	事業形態により判断	分配不可
形 態	株式会社・有限会社等	株式会社・有限会社等、協同組合、任意団体、NPO 法人	任意団体・NPO 法人

出所：藤江俊彦『コミュニティ・ビジネス戦略』（第一法規、2002年）、72頁の図表19を参考に一部文言を変えて引用した。

## (3) 結語

『論語』の中に、「葉公問政。子曰、近者説、遠者来。」(しょうこう、まつりごとをと。し  
いわく、ちかきものよるこべば、とおきものきたる。)9)と、ある。これは、政治の要道を孔子  
に質問したものである。観光まちづくりに置き換えてみると、全くその本質を突いている。グ  
リーンツーリズムの実践や観光まちづくりにも通用する“哲学”であろう。そして、月並みな  
言葉であるが、“人材”を磨いて“人財”にする「ひとづくり」がグリーンツーリズムを活か  
した観光まちづくりのキーを握っていると、確信する。

「“ボランティア活動”⇒“NPO 事業”⇒“コミュニティ・ビジネス”」といった過程を、  
徐々に拡大し、農業「“ビジネス”」化を目指し、わが国の「農」と「食」を考え、地域の活性  
化につなげていくため、南泉州地域においてもプラス指向でグリーンツーリズムを活かした観  
光まちづくりを進めて行くことが肝要であると考え。このようなことを進めていくことが、  
「田園“観光”都市」づくりにつながっていくものといえる。

そのためには、農業者と観光者を結びつけるコーディネーター（組織）の必要性を痛感し  
た。したがって、今後の行政は、コーディネーター（組織）の育成が喫緊の課題であると結論  
付ける。

## 注

- 1) この「田園“観光”都市」を位置づける前に、1898年、イギリスのエベネザー・ハワードが提  
唱した「田園都市」について簡単に説明しておこう。  
ハワードは、田園のなかに独立した新しい理想的都市のことを「田園都市」であるとして、田園  
に囲まれた3万人くらいの美しい町を大都市周辺につくることを説いた。すなわち、田園都市と  
は、都市と田園の長所を備え、自然の美と社会的な機会が共にあるまちのことである。  
筆者は南泉州地域のような田園地帯が広がり、点在しているものの個性的な観光資源を持つ都市  
やまちは、自然との共生を唱えて「田園都市」を目指すべきである、と考える。ただし、ハワード  
が提唱した田園都市とは異なる南泉州地域の歴史・風土、人情、景観、土壌等に根ざした「田園都  
市」、このような都市を「田園“観光”都市」として位置づけて、これを目指すべきであろう。こ  
の「田園“観光”都市」の基本的な政策を実現する手段として、グリーンツーリズムによる観光ま  
ちづくりをデザインし、実践していくことが有効である、と考える。
- 2) 『観光まちづくりガイドブック』アジア太平洋観光交流センター、2001年。
- 3) 丹下博文編『地球環境辞典』（中央経済社、2003年）、105頁。
- 4) 前掲書、56頁。
- 5) 前掲書、60頁。
- 6) 宮崎 猛編著『グリーンツーリズムと日本の農村』農林統計協会、1997年、11頁。
- 7) 中尾 清『観光概論講義（改訂版）』摂河泉文庫、2006年、2頁。
- 8) 中尾 清『自治体の観光政策と地域活性化』イマジン出版、2008年、31頁。
- 9) 諸橋轍次「子路第十三」『論語の講義（新装版）』大修館書店、2007年、299頁。